

# 「高知ナス」新品種‘土佐鷹’の促成栽培 (第2報) 主枝の摘葉方法および側枝の整枝法が収量・品質 に及ぼす影響

橋本和泉・小松秀雄・細川卓也

Forcing Culture of New Eggplant Variety ‘Tosataka’  
Bred in Kochi Prefecture.

II. Effects of the Training Methods for Leaves or Lateral Branches for  
the Fruit Yield and Quality.

Izumi HASHIMOTO, Hideo KOMATSU and Takuya HOSOKAWA

## 要 約

高知県農業技術センターで育成した「高知ナス」の新品種‘土佐鷹’の促成栽培において、着色不良果の発生を抑えて上品率を高め、上品収量を多く維持する栽培技術を確立するため、主枝葉の摘葉方法および側枝の整枝法が収量・品質に及ぼす影響について検討した。

1. 主枝果の収穫時に下位葉を2枚ずつ全摘葉とする摘葉法に比べて、無摘葉とする場合には、総開花数は多いが、着色不良果の発生が著しく多く、上品収量はほぼ同等であること、収穫果直下のうね内向きの1枚のみを摘葉する場合には、総開花数は著しく多いが、短形果や扁形果が多く発生し、上品率や上品収量はほぼ同等であることが認められた。
2. 主枝葉は無摘葉とし、主枝の基部2節の側枝を第1次側枝果の収穫後に摘除し、その他の側枝は1芽摘心とした場合、全ての側枝を1芽摘心とする慣行法に比べて、着色不良果の発生は著しく少ないが、扁形果が著しく多く、収穫果数や上品収量はやや少ないことが認められた。
3. 第1次側枝を1芽摘心、2芽摘心および3芽摘心として、いずれも第2次側枝以後は1芽摘心とした場合、側枝の本数が多いほど、収穫果数は多いが、落果数も著しく多くて収穫果率が低く、また、上品果実の収穫所要日数が1～3日長くなること、さらに、着色不良果やボケ果の発生が著しく多く、上品収量が著しく少ないことが認められた。

キーワード：ナス，整枝法，収量・品質，促成栽培，摘葉方法，‘土佐鷹’